

ソクラテス以前哲学者の解明 —DK.断片とカント—

Die Aufklärung der Vorsokratiker —DK.Fragmente und Kant,I.—

森 哲彦

von Tetsuhiko Mori

「ヘラクレイトスは、静止と不動を全世界から一掃しようとしていた。それというのも、これは死体が持つ特性だからである。その一方で、彼は、運動を全てのものに帰そうとした」(DK.:Frag.Hera.A6)。

「ヘラクレイトスの教説。存在するものは、対立方向への変化を通じて調和している」(DK.:Frag.Hera.A1)。

「パルメニデスは、万有を不動と見なすことによって、生成と消滅を否認した」(DK.:Frag.Par.A29)。

「パルメニデスは、感覚は虚偽的であるとする」(DK.:Frag.Par.A49)。

要旨：ヨーロッパ哲学は、古代ギリシアに始まる。古代ギリシア哲学の3つの時期区分のうち、ホワトヘッドは「プラトンの」立場から、プラトンを含む第二期に注目し、第一期のソクラテス以前哲学者達を顧慮しない。これに対し、第一期ソクラテス以前哲学者達を高く評価する哲学者達が、数名挙げられる。本論では、西洋哲学の起源は、その哲学者達が指摘するように、第一期ソクラテス以前哲学者達に有ると考え、それらの第一期哲学者達の解明を、試みるものである。

なお本論では、副題で示すように、ディールス-クランツ『断片』とカント批判哲学の論述を用いるものとする。本論文の構成について、哲学の兆候を示す哲学以前、前期自然哲学で自然の原理を問うミレトス学派、また別個にピュタゴラス学派、ヘラクレイトスを取り上げる。更に存在と静止のエレア学派、後期自然哲学の多元論と原子論、そして認識論のソフィスト思潮の特質をそれぞれ論述する。この試論は、「哲学的自己省察」の一つである。

キーワード：原理アルケー（ἀρχή/archē）、理法ロゴス（λόγος/logos）、浄化（κάθαρσις/katharsis）、数（ἀριθμός/numerus）、万物流転（πάντα ῥεῖ/panta rhei）、有る（ἔστι/esti）、根（ρίζωματα/rhizōmata）、原子アトマ（ἄτομα/atomata）、弁論術（ῥητορικὴ/rhētorikē）

目次

- I 序
- II 哲学以前
- III ミレトス学派 前期自然哲学
- IV ピュタゴラス学派
- V ヘラクレイトス
- VI エレア学派
- VII 多元論と原子論 後期自然哲学
- VIII ソフィスト思潮
- IX 結

I 序

西洋哲学は、古代ギリシアに始まる。古代ギリシア哲学は、その時期区分を、三つとする。第一は、ソクラテス以前哲学者達（Vorsokratiker）の時期（BC450頃まで、便宜上ソフィスト思潮を含む）、第二は、アテナイで活躍するソクラテス（Sōkratēs）、プラトン（Platōn）、アリストテレス（Aristotelēs）哲学者達の古典時期（BC322まで）、第三は、ストア学派とエピクロス学派のヘレニズム期と、フィロン<アレキサンドリア>と新プラトン主義のローマ期の時期（BC529まで）である。これら三つのうち、ホワイトヘッド（Whitehead, A. N.）は、自らの「思想の脈絡がプラトンの的である」¹⁾として、第二期に注目し、「ヨーロッパ哲学の伝統（the European philosophical tradition）についての最も確かな一般的特性描写は、それがプラトンについての一連の脚注（footnotes）から成り立つ」¹⁾と表現する。その理由は「プラトンの著作が無尽蔵の暗示の宝庫（an inexhaustible mine of suggestion）たらしめえた」¹⁾からである、と。このことからすれば、第一期ソクラテス以前の哲学は、プラトン哲学の序奏である、とすることになる。しかしヨーロッパ哲学の誕生と伝統に影響を与えたのは、むしろソクラテス以前の哲学ではないか。とは言え、本論は、この点について、何ら異説は立てようとするつもりではない。例えば、他の哲学者達で見ると、プラトン自らもソクラテス以前哲学者達の一部を高く評価する²⁾。またニーチェ（Nietzsche, F.）によれば「ギリシア人の真の哲学者達は、ソクラテス以前哲学者達である」³⁾。そして彼らは「哲学の理想の偉大な可能性を展示（die Aufstellung

der grossen Möglichkeiten <des> philosophischen Ideals) してくれる」³⁾と評価する。ハイデッガー (Heidegger, M.) も、ソクラテス以前哲学者達の一部を高く評価する⁴⁾。さらにカント (Kant, I.)⁵⁾も、ソクラテス以前哲学者達等の多数を彼の著作に引用し、積極的に論評を加えている⁶⁾。これら四者のうち、本論では、カントの主観哲学を取り上げる。それは、カント批判哲学が「自然の形而上学と道徳の形而上学」(Kant:X 145) 全般について論述していることによる。カント批判哲学も、それこそ「無尽蔵の暗示の宝庫たらしめる」と考えられる。そして本論で、古代ギリシア「哲学の過去に立ち返ることは、常に同時に哲学的自己省察と自己反省という行為である」⁷⁾と、言ってよいであろう。本論では、ソクラテス以前哲学者達の解明を、ディールス-クランツ (Diels, H. -Kranz, W.) の著作『ソクラテス以前哲学者断片集』⁸⁾ (以下、DK.: Frag. または『断片』と略記) と、カント批判哲学によるソクラテス以前哲学者達の教説論評を取り入れて構成する。

II 哲学以前

古代ギリシア哲学は、宇宙や自然の究極の原理アルケー (ἀρχή/archē) とは何か、と言う問いから始まる。しかしカントによれば「ギリシア以前には、如何なる民族も本来の意味において哲学すること (philosophieren) を始めなかった」(Kant:X VIII 535)。確かに、ディールス-クランツ『断片』には、古代ギリシア哲学以前の神話や箴言詩も取り上げられている。その『断片』によれば、ギリシア以前には、最初期の哲学以前を構成する四つの兆候が、見られる。そして哲学以前では、人は「概念 (Begriff) をいつでも形象(比喩)によって具体的に理解しようと試み」(Kant:IX 27) ている。

第一の兆候は、ギリシア神話ミュートス (mῦθος) である。この神話について「叙事詩」の形で古代ギリシア民族の客観的で共通意識を詠う代表的作品は、BC 8 世紀後半のホメロス (Ὅμηρος/Homer) の『イリアス』と『オデュッセイア』、ヘシオドス (Ἡσίοδος/Hesiod) の『神統記 (テオゴニア)』である。それらは一種の超自然的、霊的存在を認め、神々と人間どもの起源を示す宇宙生成説である。この宇宙生成説が、哲学に連関する。まずホメロスの神話では、万物生成の原因について「全てのものを養う大地の崖に行き、神々のオケイアノス (祖・大海) とテテュス (母) から始めている」⁹⁾。ヘシオドスの宇宙生成説では「まず初めに生じたのは、カオス (空隙、混沌) である。次に胸幅広いガイア (大地) と [...] さらに、こよなく美しい神々や人間どもの胸中の悩みと深い心を打ちらかすエロス (愛) が生れた」¹⁰⁾。このように神々の名において、詩的空想が語られる。そしてこれらの比喩的な思考方法からの脱却が、哲学の誕生となる。それゆえギリシア神話は、まず否定的な意味で、哲学を準備するものとなる。

第二は、七賢人 (die sieben Weisen) の伝説である。古代ギリシア人達は、BC 7 世紀から 6 世紀にかけて、経験による知恵 (σοφία/sophia) などから、一種の理想的な人間として、

「彼らの箴言によって傑出していた」(Kant: X X VIII 535) 七賢人を選んでいる。諸説有る内、プラトンが選ぶ七賢人は「タレス、ピッタコス、ピアス、ソロン、クレオボォロス、ミュソン、キロン」(DK.:Frag.7 Weisen.2. Plat.:Protag.343A) である。彼らは「叙情詩」の形で、多くの倫理的箴言詩を残した。例えば、タレスは「汝自身を知れ」、「魂は不死である」(DK.:Frag. Tha. A1)、他20、ピッタコスは「好機を知れ」他12、ピアスは「ほとんどの人間は悪い」他15、ソロンは「不可視を可視で推量せよ」他19、クレオボォロスは「父を敬え」他19、キロンは「隣人を誹するな」他19 (DK.:Frag.7 Weisen.3) 等である。このような賢者個人の知恵や自らの経験の自覚を通して、哲学に道が開かれる。なおこれら「七賢人のうちで、学問の源をその人に求めることの出来る、人物は、タレスという名の人であり、彼は、自然学者と言う異名を取っている」(Kant: X X VIII 535)。

第三は、科学技術の成立以前である。バビロニア、エジプト、およびオリエントの数学、医学、天体、および技術の断片的で実用的な経験的知識は、哲学以前に見られる。そしてこれら断片的知識は、BC6世紀のピュタゴラス (Pythagoras) の定理やBC3世紀のユークリッド (Eukleidēs) の幾何学に見られるように、古代ギリシア哲学古典時代に、初めて科学として、相互関連づけられ、原理から理論化されるものとなる。

第四は、オルペウス教 (Ὀρφικοί/Orphikoi: Or.) である。それは「最初の詩人」(Kant: XX VIII 536) オルペウス (Ὀρφεύς/Orpheus) に始まる古代ギリシア宗教の一つである。BC8世紀頃、ギリシア神話の中に、ディオニュソス (Διονύσος/Dionysos) とその宗教がある。その祭司が、オルペウスである¹¹⁾。さてディオニュソスは、葡萄酒の神である。その「バッコス (Βάκχος/Bakchos) 神の祭」(DK.:Frag. Or. A8) は、熱狂と陶酔を旨とする。このディオニュソス教が、BC7世紀になるとオルペウス教に変革される。それは、ディオニュソス教の肉体的な陶酔から「最も美しい報酬は、永遠の陶酔 (ἔκστασις/ekstasis) であると考えている」(DK.:Frag. Or. B4. Plat.:Rep. II 363C) 精神的な陶酔への転換である。ディオニュソス教が、生に対する肯定的態度を取るのに対し、オルペウス教は、個人的、心霊的な信仰の立場である。オルペウス教は「身体と魂、彼岸と此岸の二元論」¹²⁾を説く。またホメロスの擬人的神観では、魂は此岸に属し「黄泉の国」に弱々しく亡霊として暮らすのに対し、オルペウス教での魂は、彼岸に属し「秘儀」(DK.:Frag. Or. A16) により「浄化が可能」(DK.:Frag. Or. B5. Plat.:Rep. II 364E) であり、不死である。しかし魂は「ある罰のために [...] あたかも墓の中に埋葬されているように、身体の中に埋葬されている」(DK.:Frag. Or. B3)。一方「それ (身体 σῶμα/sōma) は、魂の墓場 (sēma) である」(DK.:Frag. Or. B3. Plat.:Cratyl. 400B-C) ことにより、此岸に追放される。しかしその魂の輪廻から抜け出す道は「禁欲主義、神秘主義」¹³⁾、「菜食」(DK.:Frag. Or. A8) 主義、厭世的態度にある。これにより、魂は浄化され、天界に輪廻転生する。オルペウス教の宇宙生成説は「初めに水があり」(DK.:Frag. Or. B13)、「カオス (空隙) とニュクス (夜)、漆黒の

エレボス（幽暗）と廣大無辺のタルタロス（奈落）があった」（DK.:Frag.Or.A12）ことに示される。オルペウス教は、魂の浄化カタルシス（κάθαρσις/katharsis）の点で、後のピュタゴラス学派に、二元論でプラトンに、さらに神秘的な面で、ローマ期の新プラトン主義、プロティノス（Plotinos）に影響を及ぼす。古代ギリシア哲学における心霊的、宗教的なものの起源には、オルペウス教を外しては考えられない。

以上に見られる哲学以前の四つの兆候は、カントによれば「全てのものを形象（比喩）によって表象しており、何ものをも概念によって表象していなかった」（Kant:XXVⅢ535）。例えば、オルペウスらの「詩を見てみると、実際、彼らの文体の輝きは、ただ単に自分たちの概念を表現する手段の欠如による、いわば怪我の功名であることは明らかである」（Kant:VⅡ191）。従って哲学成立では、詩や形象に対して概念が、神話に対して原理に基づく理論が、宇宙生成説に対して宇宙理論が、生じるものとなる。

Ⅲ ミレトス学派 前期自然哲学

ギリシアの植民都市国家、イオニア（Iōnia）のミレトス（Miletos）の地に、BC7世紀後半から6世紀前半にかけて、自然を万物の原理から説明する科学者、哲学者に、タレス、アナクシマンドロス、アナクシメネスが挙げられる。彼らミレトス学派は、自然学者達（φυσιολογοί/physiologoi）である。そして物質的、精神的「閑暇（scholē）」を有する彼らこそが「最初に形象（比喩）を手引きとしてではなく、抽象的に理性認識を育成しようと試みた」（Kant:IX27）哲学者達である。

1、タレス

タレス（Thales:Tha. BC624-546）は「最初エジプトに赴き」（DK.:Frag.Tha.A11）イオニアの伝統的慣習から開放され、自由の精神から「幾何学」（DK.:Frag.Tha.A11）や「哲学を学んだ後、晩年にミレトスに赴いた」（DK.:Frag.Tha.A11）。アリストテレスは、哲学の原理を物質的な個物に見ているので「タレスが哲学（φιλοσοφία/philosophia）の開祖である」（DK.:Frag.Tha.A12. Arist.:Metaph. A3,983b20）とする。「彼（タレス）はイオニア（ミレトス）学派の創始者」（Kant:XXⅧⅢ535）である。タレスは、哲学者である以前に、七賢人のうち、唯一の学者とされ、「数学者でもあったが、自然学者という別名も持っていた」（Kant:IX28）。タレスの哲学について知られていることは、アリストテレスによれば「最初の哲学に携わった人の大多数は、ただ質料ヒュレー（ὕλη/hylē）の形に属する原理アルケーのみが万物の原理であると考えた。〔…〕しかしこのような原理の数と型については、全ての人と同じことを言っているわけではない。哲学の開祖であるタレスは、水（ὕδωρ/hydōr）がそれ（原理）であると言っている」（DK.:Frag.Tha.A12. Arist.:Metaph. A3,983b20）。では何故タレスは、水をアルケーと

するのか。それはオルペウス教の宇宙生成説で「オルペウス教の神話では〔…〕初めに水があり、そして素材があった。その素材が凝固することにより、そこから大地が形成された」(DK: Frag. Or. B13) こと。また「オルペウスによると「水」は、万物の始源であり、水から泥が形成される」(DK.: Frag. Or. B13) こと。このようにオルペウス教の宇宙生成説には、水こそ始源という観念が含まれている。このような神話が、タレスの内にも生きていた、と考えられる。とは言え「タレスがこのような〔水を原理とする〕見解を抱くようになったのは、恐らく万物の栄養が湿っていること、また熱そのものが湿ったものから生成し、また熱から生きると言うことなどを観察したことからであろう」(DK.: Frag. Tha. A12. Arist.: Metaph. A3. 983b20)。このようにタレスは「水」を成るがままのものと考えている。他にタレスが「エジプト人から学んだ水が、万物の元のものであると想定し」(DK.: Frag. Tha. A11)、「水」を有るがままのものとも考えている。そしてタレスは「自ら万物を造り出す〔神話の神とは異なった〕神」(DK.: Frag. Tha. A2)があるので「万物は神々に充ちている」(DK.: Frag. Tha. A12. Arist.: Psychē. A5. 411a7)とも考えている。

またタレスは、宇宙理論として「大地は水の上に浮いている」(DK.: Frag. Tha. B14. Arist.: de coelo, B13. 294a28) とする。このようにタレスは、自然ピュシス (φύσις/physis) を神話からでなく、自然そのものの、有るがままのと成るがままの自然の客観的真実を問題とし、この自然の元のもの質料とは何か、を問う。多様で変化に富む事物の統一者、変えるに換えられない質料とは何か、を問う。それが経験的な「水」である。そしてタレスは、生物のみならず「無生物も魂を持っている」(DK.: Frag. Tha. A1) とし、説明の原理を、全てものが生きて自ら動くと言う、いわゆる物活論 (hylozoism) に見出している。カントによれば、このようにタレスは、物質を「諸概念そのものに従って、自らア・プリオリ (a priori) に考え入れ、表述したもの〔水〕によって〔諸特性を〕産出しなければならないと言うこと」(Kant: BXI) を見出している。タレスの行為が、哲学の第一歩とされるのは「タレスの時代から初めて、恐らく数学的な証明と、立法によって」(Kant: XV596) 神話から外へ出て「質料に属する原理」は何かと言う、理法ロゴス (λόγος/logos、論理的説明方法) が、初めて見られたことによる。

2、アナクシマンドロス

アナクシマンドロス (Anaximandros: Anaxima. BC610-546) は「ミレトスの人で、哲学者タレスの縁者であり、弟子にして後継者である」(DK.: Frag. Anaxima. A2, A9)。アナクシマンドロスもタレスと同様に万物のアルケーを探究する。しかし「アナクシマンドロスは、例えば、タレスが湿ったものからの生成を考えたように、万物が単一のものから生じるとは考えず、それぞれのものに固有の元のもの〔始源〕から生じると考えた」(DK.: Frag. Anaxima. A17)。なぜなら「彼は、生成を〔タレスのように〕基本要素の質的変化によるものとはせず、対立相反し合

うもの」(DK.:Frag. Anaxima. A9) と考える。この「対立相反し合うものとは、温かいものと冷たいもの、乾いたものと湿ったものなどのこと」(DK.:Frag. Anaxima. A9) である。これらは相互に対立する性質を持っており、互いを否定し、消滅する。従って、アナクシマンドロスは、アルケーが、タレスの言う水のような自然物に属さず、自然物を越えて存在する抽象的な原理と考える。それをアナクシマンドロスは「無限なもの・アペイロン (τὸ ἄπειρον/to apeiron) が存在するものの元のもの〔始源〕である」(DK.:Frag. Anaxima. A14) とする。ト・アペイロンは、対立するものを本来有していない。従って、アナクシマンドロスは、始源について「明らかに無限なものを素材として用いている」(DK.:Frag. Anaxima. A14)。そして「無限なものは、神的なものである」(DK.:Frag. Anaxima. A15) と考え、「それは、不死にして不滅である、と言っている」(DK.:Frag. Anaxima. A15)。それゆえアナクシマンドロスが認定する万物のアルケーは、特殊な概念的性質と言うよりは、むしろ対象のない無規定的、無限定的、従って超経験的とした方が、合理的と解される。では万物の生成消滅、つまり「存在するものにとっては、生成の始源へ消滅することも必然的 (δίκη/dikē) に起こる」(DK.:Frag. Anaxima. B1) とは、どのように考えられているのか。アナクシマンドロスは、それは「これ(無限なもの)から万物が生じ、また万物はこれへと消滅して行く」(DK.:Frag. Anaxima. A14) ものと言う。従って、ト・アペイロンから、水や火などのような規定された自然物が、生成消滅するのである。そうであるとするなら、アナクシマンドロスの言う自然は、不生不滅で、かつ生成消滅であり、矛盾するように見える。しかしそれは、タレスが物活論で、自然を有るがままのもの、成るがままのものと捉えるのと同じであり、矛盾の同一である限り、不思議ではないのである。

さて宇宙理論についてアナクシマンドロスは「永遠なるものから、冷たいものと温かいものを生んだものが、この世界の生成に当たって分離し、[...] 焔の球形が大地を取り巻く空気の周りに生じてきた。それからこの球形が破裂し、[...] 太陽や諸々の星が生じた」(DK.:Frag. Anaxima. A10) とする。そして生物の生成については「最初、生物は、湿ったもののうちに棘の多い外皮に包まれて生じたが、歳をとった時に、乾いたものの上にあがってきた」(DK.:Frag. Anaxima. A30) とする。また人間の発生について「最初の間は、魚の中から生じ、その中でちょうど鮫のように育てられ、十分に自活できるようになって、初めて外に出て来て、大地に上った」(DK.:Frag. Anaxima. A30) とする。そして「無限なもの」からすれば、それら世界や生物、人間も生成と共に消滅が必然として行なわれるものとなる。

3、アナクシメネス

アナクシメネス (Anaximenes: Anaxime. BC585-525) は「ミレトスの人、アナクシマンドロスの弟子にして後継者」(DK.:Frag. Anaxime. A2) である。アナクシメネスは、アナクシマンドロスのように原理をト・アペイロンとせず「無限な空気 (ἀήρ/aēr)」(DK.:Frag. Anaxime.

A7) と考える。そしてアルケーを無限な「空気が、宇宙世界全体を包括する」(DK.:Frag. Anaxime. B2) と言う。「アナクシメネスは、アナクシマンドロスと同じく基体となるものが、単一で無限であると言うが、アナクシマンドロスのように、それを無限定的なもの (ἀόριστος /aoristos) とはせず、限定されたものであると言い、空気がそれであると述べた」(DK.:Frag. Anaxime. A5)。無限概念の否定の解釈は「空気は、無限なものであるが、空気から生成して来るものは、限定されたもの」(DK.:Frag. Anaxime. A9) と言う、意味である。従って無限な空気の変化によって、万物が限定されるのである。

宇宙理論について、彼は、無限な「空気は、希薄 (μανός/manōs) と濃密 (πυκνός/pyknōs) の違いによって、在り方を異にする、[...] 運動は永遠である」(DK.:Frag. Anaxime. A5)。すなわち空気が「濃密になったり、希薄になったりすると、特性が現れる。希薄化の方向に拡散すると空気が火になり、逆に空気が濃密になると、それが風、雲、水、大地、および石」(DK.:Frag. Anaxime. A7) と森羅万象に変化する。従って「生成のために最も重要な役割を担っているのは、対立相反的なもの、すなわち温かいものと冷たいもの」(DK.:Frag. Anaxime. A7) という空気の密度差である。これがアナクシメネスの宇宙理論である。そこでアナクシメネスは、始源として「無限なもの」ト・アペイロンを好まず、従って無規定的なものでは、世界形成や生成変化は、合理的に了解しがたい、と考えたのであろう。そうだとすれば、アナクシマンドロス説の改変である。一方、天体論では、タレスが「大地は水の上に浮いている」(DK.:Frag. Tha. A14) とし、アナクシマンドロスが「大地は如何なるものにも支えらずに宙空に浮いている」(DK.:Frag. Anaxima. A11) とするように、アナクシメネスも「大地は、平板で、空気の上に「浮遊している」」(DK.:Frag. Anaxime. A7) とすることでは、正しくミレトス学派の完成者である。

IV ピュタゴラス学派

ミレトス学派にやや遅れ、BC 6 世紀末、南イタリア植民都市クロトン (Krotōn) に一種の宗教的教団であるピュタゴラス学派が現れる。「ピュタゴラス結社 (教団) の目的は、宗教 (Religion) を民衆の妄想から純化すること、暴君政治を緩和すること、国家に幾らかの合法性を導入すること」(Kant: IX29) である。そのうち「宗教を民衆の妄想から純化する」ため「ピュタゴラスは公教的、すなわち全民衆に向って講演するような教えを [も] 持っていた」(Kant: XXVIII537)。しかし他方で「僭主制を抑制」(Kant: XXVIII537) せんとしたため「暴君たちによって恐れられ始め」(Kant: IX29) た。そのため彼は「秘密厳守」(DK.:Frag. Pytha. 17) によって「結成された哲学者の教団を創設したのである」(Kant: XXVIII537)。しかしその後「この哲学の結社は、[...] 死刑にされ、[...] 逃亡し、[...] 追放させられたことにより解消させられた」(Kant: IX29)。そのため「ピュタゴラスには [残された] 著作は無かったと言うことでは、意見

が一致している。だが彼にまつわる出来事を記録した人が多数いた」(DK.:Frag.Pytha.18) ため、ピュタゴラスと教団員を合わせて、彼らは、ピュタゴラス学派 (Pythagoreioi) と呼ばれている。

1、ピュタゴラス

ミレトスの近く「サモス (Samos) のピュタゴラス (Pythagoras:Pytha.BC570-500) は、[...] エジプトに赴き、かの地の人々の弟子となり、哲学をギリシアにもたらした最初の人」(DK.:Frag.Pytha.4) である。そもそも「ギリシア人の中では、自然学者と神学者との間の区別があった」(Kant:XXVIII536)。しかし「ピュタゴラスは、自然学と神学、それゆえ可視的なものについての教説と不可視的なものについての教説とを、自分の秘密の教説の媒体とした」(Kant:IX29)。ピュタゴラス教説の特徴として、ミレトス学派に見られない、不可視的なものの教説、神学の枠組みについては、すでにエジプト人が「人間の魂は、不死であり、肉体が減びると、そのつど生れて来る別の動物の中に入って宿ると言う説」(DK.:Frag.Pytha.1) を唱えている。ピュタゴラスも「魂は、不死であり、次に他の動物に生まれ変わる」(DK.:Frag.Pytha.8) とする。この教説は、オルペウス教の「身体と魂、彼岸と此岸」¹⁴⁾ にも見られるが、これが「ピュタゴラスの魂の輪廻転生」(DK.:Frag.Pytha.8) 説である。一方、可視的なものの教説、自然学では、ピュタゴラスは、自然調和の説明を行なう。つまり「ピュタゴラスは、万物を包み込むものを、その中にある秩序に基いてコスモス秩序体 (κόσμος/kosmos) と名づけた最初の人であった」(DK.:Frag.Pytha.21)。このようにピュタゴラスの自然学は、ミレトス学派の自然学が自然の質料的説明を行なうのに対し、自然の形相的説明を行なう。

また「ピュタゴラスは、最初に数学や数 (ἀριθμός/numerus) について研究した」(DK.:Frag.Pytha.7) 人である。カントによれば、ピュタゴラスは「全てのア・プリオリな認識 (直観を含んでも概念を含んでもよい) を叡智的なものとして数えることによって数学に基いて哲学した」(Kant:VIII392) のである。彼は、数の比と音楽 (μουσική/mousikē) の関係、つまり永遠の真理である数と魂を鎮める音楽を重視する。カントによれば「ピュタゴラスは、諸々の音の間の数的関係およびそれらの音が従うことで、音楽が構成される法則を発見することで [...] 超越的 (transzendent) な支配的悟性 (知性 Verstand) によって、数的関係に従って秩序づけられる自然の直観が内在していると言う考えを持つに至った」(Kant:VIII392) とすることである。アリストテレスも言うように「ピュタゴラス学派にとって、天界の構造の全体が、音階 (調和 ἁρμονία/harmonia) と数である」(Arist.:Metaph.986a)。そしてカントも音の間の数的関係の考えが「天体に適用されて諸天球の調和 (Harmonie) とする学説を生み出した」(Kant:VIII392) とする。さらに数学では「ピュタゴラスが、幾何学の原理を最初から考察し、その定理を非物的に知性的に探究することによって、幾何学に関する愛知を自由人に相応しい教養と言う

形に変えた。彼こそが、比例についての教説」(DK.:Frag.Pytha.6)を発見した人である。そしてピュタゴラスは、幾何学の定理の一つとして、直角三角形の定理テトラクテュス(τετρακτύς /tetraktys)を発見する。

またピュタゴラスは「オリンピア競技」(DK.:Frag.Pytha.14)の比喩に関連して、人間を三様に区分する。この区分を受けて、プラトンは、人間の快樂について、1低級の者は、売買して「富や利得を愛する人」、2中級の者は、競技に参加して「榮譽や勝利を愛する人」、3高級の者は、見物して「知や理を愛する人」(Plat.:Rep.582-583a)である、とする。ピュタゴラスが後の哲学に及ぼした影響は大きい(Plat.:Rep.582-583a)。プラトン哲学には、魂の不死、形相、数学定理、人間の三区分などが受け継がれる。また新プラトン主義には、宗教的、精霊的な面が継承される。

V ヘラクレイトス

ヘラクレイトス(Herakleitos: Hera. BC540-470)は「エベソス(Ephesoa)の人にして、自然哲学者であり、暗い人(σκοτεινός /skoteinos)と呼ばれた」(DK.:Frag.Hera.A1a)。「憂鬱症」(DK.:Frag.Hera.C5)のためか、彼は「もし一人の人が最高の者であるなら、私は一人で一人に当る」(DK.:Frag.Hera.B49)とし「彼は誰の弟子でもなく、[...]自分自身を探究して、万物を自分自身から学んだ」(DK.:Frag.Hera.A1)とする。そして人間の「知恵とは、唯一つ、万物を通して万物を操る思慮に精通していること」(DK.:Frag.Hera.B41)とする。ヘラクレイトス哲学の第一の特色であるこの「万物を操る思慮」とは、「万物流転(πάντα ῥεῖ/panta rhei)」(DK.:Frag.Hera.A6.Plat.:Cratyl.402A)である。この世界の真相について、プラトンによれば、ヘラクレイトスは「万物は流転し、何ものも留まらない、[...]そして同じ川に二度入ることは出来ない」(DK.:Frag.Hera.A6.Plat.:Cratyl.402A)とする。アリストテレスも、ヘラクレイトスによれば「万物は流転する。何ものも恒常の存在に止まらない」(Arist.:de caelo, 298b30)とする。このことは、ミレトス学派が、原理を、世界の質料的説明に、ピュタゴラス学派が、形相的説明に置くのに対し、ヘラクレイトスは、原理を万物流転とそのロゴス理法とすること、を意味する。従ってヘラクレイトスにとり、原理は、ミレトス学派の水やト・アペイロンや無限な空気ではなく、それらを規定する生成変化であり、正に万物流転である。ヘラクレイトスは、この生成変化の世界が「火」に起因することを「世界は火から生まれ、一定の周期に従い、永遠にわたり交替しながら、そして再び火と成る」(DK.:Frag.Hera.A1)とする。具体的には「火は土の死を生き、空気は火の死を生き、水は空気の死を生き、土は水の死を生きる」(DK.:Frag.Hera.B76)と。従って「万物は、火から生成し、そして火へと終息する」(DK.:Frag.Hera.A5)のであり、「またその逆でもある」(DK.:Frag.Hera.B76)。このように「ヘラクレイトスによると、周期的な永遠の火(は神であり)、ロゴスとは、存在するものどもを、

逆向きへの運動によって創り出す運命である」(DK.:Frag.Hera.A8)とする。こうしてヘラクレイトスは、万物の生成変化を、直線的でなく、「万物から一が生じ、一から万物が生じる」(DK.:Frag.Hera.B10)として、円環的に捉えている。そして生成変化は、対立を含むものであり「戦いは万物の父であり、万物の王である」(DK.:Frag.Hera.B53)と。そして生成変化が円環的であることは、戦いや対立の中に、調和〔静〕を含むものとなる。この対立と調和の矛盾の同一と言う事態を、哲学の第二の特色として、ヘラクレイトスは「弓や豎琴に見られるような対立的調和結合である」(DK.:Frag.Hera.B51)と説明する。

このように世界は「共通のロゴス」(DK.:Frag.Hera.B2)の支配を受けているとして、ヘラクレイトスによれば「万物はこのロゴスに従って生成している」(DK.:Frag.Hera.B1)とする。このロゴスは、神であって、人間ではない。「神にとっては、万物が美であり、善であり、正であるが、人間どもは、或るものを不正、その或るものを正しいと考える」(DK.:Frag.Hera.B102)。それゆえ判断する人間どもは、ロゴスが何であるかを知らない。そこで人間どもに望まれる真の知恵は「万物を操る思慮」(DK.:Frag.Hera.B41)、「万物流転」(DK.:Frag.Hera.A6)に従うことである。

VI エレア学派

ヘラクレイトスは、世界を生成変化の相から見ている。これに対し、エレア (Elea) 学派で新たに見出された原理は、絶対的静止、不動性の相と論理だけから存在の世界を見るものである。このような存在の形而上学に立つ哲学者、論理家には、南イタリア植民都市エレアのクセノパネス、パルメニデス、ゼノン、メリッソスが挙げられる。「ギリシア人の中では、自然学者と神学者との間に区別があった」(Kant:XXVIII536)。そのうちピュタゴラス学派とは異なり「エレア学派のうちの多くの方は、神学者であった」(Kant:XXVIII536)。「彼らの原則は「感官のうちには、欺きと見せ掛け (仮象 Schein) とがあり、ただ悟性 (知性) のうちにのみ真理がある」というもの」(Kant:XXVIII536)である。

1、クセノパネス

クセノパネス (Xenophanēs: Xen. BC570-475) は、イオニア地方の植民都市コロボン (Kolophōn) の人で、後にエレアに赴き「エレア学派の創始者」(DK.:Frag.Xeno.A8)となる。彼は作品『自然について』(Περί φύσεως/Peri physeōs) (DK.:Frag.Xeno.B30) から見て、詩人であり、哲学者である。詩人としてのクセノパネスは、ギリシアの伝統意識を保持するヘシオドスやホメロスが「神々に関して語っている事柄」(DK.:Frag.Xeno.A1)を多神論として批判する。クセノパネスにとり「神は唯一である。と言うのも、神が多数いることになると、神は自ら為さんと欲するところの全てを為すなすことができないであろうから」(DK.:Frag.Xeno.

A28) である。しかるに「人間どもは、神々が〔人間どもがそうであるように〕自分達と同じように生まれたものであり、着物や似姿を持っているものと思っている」(DK.:Frag. Xeno. B14)。しかも「ホメロスとヘシオドスは、人間の世では、軽蔑と非難的とされる全てのことを神々に帰している。〔それは〕盗みすること、姦通すること、詐欺することなど」(DK.:Frag. Xeno. B11) である。それゆえクセノパネスは、彼らの擬人的神観を批判する。ではギリシア神話の神々と区別される本当の神、自然神とは何か。真の神「唯一の神は、神々と人間どもの全てのうちで最も偉大であり」(DK.:Frag. Xeno. B23)、「神は全体として見、全体として考え、全体として聞く」(DK.:Frag. Xeno. B24)、「神は労することなく、心の思いをもって、全体を揺り動かす」(DK.:Frag. Xeno. B25)、「神は常に同じところに留まって、少しも動かない」(DK.:Frag. Xeno. B26) のである。それゆえ「それ(神)が生成するのは不可能であろうからである」(DK.:Frag. Xeno. A28)。従って「神は、万物と本性において結びついており、球形で〔…〕他から情態を被ることなく、不変で、理性的である、と断定的に」(DK.:Frag. Xeno. A35) 述べられる。この神学は、近代の用語で表現すれば、宇宙全体がそのまま神であるとする「汎神論」¹⁵⁾に当たる、と言えよう。従ってクセノパネスの注釈家達テオドレトスやストバイオスは、クセノパネスが「万物は土から生成し、土へと帰還する」(DK.:Frag. Xeno. A36) もの、と評している。しかしクセノパネスにとって原理は、不変であって、質料としての土をアルケーとしている訳ではない。それゆえそれは、矛盾とは言えない。それは、世界をそのまま一つの全体と見る唯一性だからである。

さらにクセノパネスの宇宙理論について、アリストテレスによれば「クセノパネスは、最初に一つなるものを主張した人である。〔…〕クセノパネスは、全宇宙に注目して、唯一つなるものが神である」(DK.:Frag. Xeno. A30. Arist.:Metaph. 986b18) と言う。ここから世界が一つなる存在である、と言う考えは、エレア学派に共通するものとなり、クセノパネスがエレア学派の開祖と言われる故である。では一つなる神と人間の区別は、如何に表現されるか。それは「神について、〔…〕人間は誰一人として神を見た者はいないし、将来も知っている者はいないだろう」(DK.:Frag. Xeno. B34) と。これは一方で神の絶対化と、他方で人間の相対化の区別である。クセノパネスは「神が唯一である」(DK.:Frag. Xeno. A28) とすることにより、人間の知恵の限界、無知の自覚を示しているであろう。

2、パルメニデス

パルメニデス (Parmenidēs:Par. BC540-470) は、エレアの人で「クセノパネスの弟子」(DK.:Frag. Par. A6)であり「ピュタゴラス的閑暇生活をする人」(DK.:Frag. Par. A4)である。そして「クセノパネスやエンペドクレスと同様に、パルメニデスもまた詩によって哲学を説いている」(DK.:Frag. Par. A1)。彼の叙事詩の形で書かれた作品『自然について』(DK.:Frag. Par. B1)

は、二部からなる。第一部は、真理（ἀλήθεια/alētheia）の道で、哲学の真骨頂が、第二部では、憶見（δόξα/doxa）の道で「感覚への顧慮」（DK.:Frag.Par.B7）が語られている。「パルメニデスは、クセノパネスから学んだ」（DK.:Frag.Par.A1）とされるように、それは「パルメニデスとクセノパネスが、万有を一つであり、不動であり、不生であり、限定されているとして、有らぬものを探究することを認めない」（DK.:Frag.Par.A8）とするところにある。さらにパルメニデスは「一つなるものを「球形の塊のようなもの」（DK.:Frag.Par.A20）として、その限界を認めている。ここにおいてパルメニデスの「存在の形而上学」が開始されるものとなる。

まず作品の『自然について』第一部、真理の道、つまりパルメニデスにとり「真理の規準」（DK.:Frag.Par.B7）、第一命題は「探求の道として考えられるのは、その一つは「有る（ἔστι/esti）」そして「有らぬことは不可能」と言う道」（DK.:Frag.Par.B2）である。「必要なのは、ただ有るもの（τὸ εἶν/to eon）のみが有ると言い、かつ考えることである。なぜなら有は有るが、無は有らぬからである」（DK.:Frag.Par.B6）。従ってパルメニデスは「一般に生成と消滅を否認した。と言うのは、有るものの何ものも生成消滅」（DK.:Frag.Par.A25. Arist.:de caelo, 298b14）しないからである。つまり万物に生成ではなく、存在が有るのみである。ここからパルメニデスは、経験や「事実の明証性には全く注意を向けずに、論理の整合性にのみ注目すべきだと考えている」（DK.:Frag.Par.A25）のである。

さらにパルメニデスは、真理の道、第一命題を一層明らかにするために、第二命題、憶見の道「感覚への顧慮」（DK.:Frag.Par.B7）の道を措定する。さてパルメニデスにとり「思惟することと有ることは同一である。なぜなら思惟（νόος/noos）で言い表される有るものとの関係のない思惟を我々は見出すことが出来ない」（DK.:Frag.Par.B8）からである。にもかかわらず人間の感覚から「有るものの外に何が、無から生じて来る」（DK.:Frag.Par.B8）という生成消滅が考えられたりする。その考えは「ただ我々のそれ（生成消滅）が有るように見えるに過ぎない」（DK.:Frag.Par.A25. Arist.:de caelo, 298b14）のである。そして存在の生成消滅を憶見の道としてただ潜在的に承認するに過ぎない。それゆえパルメニデスは、存在を「感覚にではなく、理法ロゴスにこそ依拠すべきことを重ねて言明している」（DK.:Frag.Par.B7）。このように、パルメニデス自身は「知性認識による理法を實在するものにおける真理の規準であることを明言し、感覚への顧慮を斥けた」（DK.:Frag.Par.B7）のである。結論として、パルメニデスの意識構造は、真理の道として理法の世界が、静的一元論として構想されている、と言えよう。

3、ゼノン

「エレア出身のゼノン（Zēnēn ho Eleatēs; Ze. BC490-430）は、偉大な悟性（知性）と明敏性を備えた人であった」（Kant:XXVIII536）。ゼノンは「パルメニデスの弟子であり、[...] 対話的論法の考案者」（DK.:Frag.Ze.A1）である。この対話的論法とは、背理法、帰謬法を意味

している。その論法は、例えば「有るもの〔存在〕は一つである」(DK.:Frag.Par.A28)とするパルメニデスの第一命題を、ゼノンが作品『自然について』(DK.:Frag.Ze.B)で証明する場合、その命題の否定「多の存在」(DK.:Frag.Ze.B2)から矛盾を導き出し、そのことから元命題が真であることを主張する、間接証明法である。ただしゼノンは、師パルメニデスの教説「有るもの」の唯一性、不動性を裏面から弁護しただけで、彼「独自の説は何も立てなかったが、これらのことにいくつかの難問を提出した」(DK.:Frag.Ze.A23)。それが難問であるのは「しかるべき説明を要求しているから」(DK.:Frag.Ze.A24. Arist.:Phys.209a23)である。ゼノンのいう背理法の対象は「多」と「運動」の存在を仮定したものである。

まずパルメニデスの「多」の否定の論法から見てみる。二つある。第一は「もし多が有るとすれば、それらのものは大にして小である。すなわち大きさにおいて無限に大きく〔他方で〕何らの大きさも持たぬように〔無限に〕小さい」(DK.:Frag.Ze.B2)となり、矛盾となる。従って「有るもの〔存在〕は一つ」(DK.:Frag.Ze.A15)と言う命題が真理となる。第二は「もし多が有るとすれば、それは必ず現に有るだけの数であり、〔…〕それらは有限となろう。〔…〕もし多が有るとすれば、有るものは〔数的に〕無限である」(DK.:Frag.Ze.B3)。つまり「多」は、数において有限であると同時に、無限となり、矛盾である。この「多」の第一と第二は、単位(存在)の無限集合の問題である。

次にパルメニデスの言う「運動」否定の論法を見る。四つある。以下ではアリストテレス『自然学』の論述から見てみよう(Arist.:Phys.239b-240a10)。第一は、二分割法である。それは「場所移動するものは、それが目的地点に到達する以前に、その中間点に達しなければならないことを根拠にして、運動変化が有らぬことを主張する」(DK.:Frag.Ze.A25. Arist.:Phys.239b9)ものである。それは、人がある地点に到達するには、常に半分の地点に進まざるをえず、このことは無限に繰り返されるので、目的地点への到達は、不可能となる。

第二は「アキレウス (Ἀχιλλεύς/Achilleus)」である。それは「最も遅い走者でも、最も速い走者によって追い抜かれない」(DK.:Frag.Ze.A26. Arist.:Phys.239b14)と言うものである。なぜなら、たとえ速い走者〔アキレウス〕が追いつくとしても、一定の時間を必要とする。しかしその間に遅い走者〔亀〕も、多少とも前進している。アキレウスがその距離をつめるまでに、亀もまた前進するので、この事態の繰り返しとなる。これも二分割法の一つである。この「運動」の第一と第二は、単位の無限分割の可能性の問題である。

第三は「飛ぶ矢は静止している」である。一般に「ものが〔それ自身と〕等しい場所にある時には、それは全く動かない〔ものである〕とすれば、そして移動しているもの〔矢〕は、常に今(瞬間)の内にあり、全てのものは今(瞬間)において〔それ自身〕と等しい場所にあるとすれば、飛ぶ矢は静止している」(DK.:Frag.Ze.A27. Arist.:Phys.239b30)と言うものである。

第四は、競争路〔行進〕である。さて「競争路において、等しい諸物体〔BとC〕は、等しい

速度で、等しい大きさの物体〔A〕に沿って、一方の列〔B〕は、競争路の端から、他方〔の列C〕は、中間点〔折り返し点〕から、同じ速度で、反対方向に動く場合、半分の時間〔 $1/2$ 〕は、その二倍〔1〕の時間に等しいと言う帰結（DK.:Frag.Ze.A28. Arist.:Phys.239b33）となる。つまり同じ時間に、同じ速度で、一方の物体Bでは2、他方の物体Cでは4、動くと言う矛盾が生じ、このような運動は不可能となる。この「運動」の第三と第四は、単位の無限分割の不可能性の問題である。

これらゼノンのパラドックスは、パルメニデスの言う「有るように見えるに過ぎない」（DK.:Frag.Par.A25. Arist.:Phys.239b9）「多」や「運動」の否定から、逆説的に、存在の唯一性や存在の不動性の肯定を引き出すものである。カントによれば、ゼノンは「精緻な弁証論者として卓越していた。弁証論は、最初、全ての感性（Sinnlichkeit）から分離された抽象的な概念に関する純粋な悟性使用の技術を意味していた。それでこの技術は、古代人の中で大いに称賛された」（Kant:IX28）。しかし後には感性から見せ掛けの真実を与えるものとなった「弁証論は、ソフィスト（Sophist）にとっての単なる訓練となった」（Kant:IX28）のである。

4、メリッソス

メリッソス（Melissos.:Meli.BC480-400）は、サモスの人で、パルメニデスに師事した（DK.:Frag.Meli.A1）。「パルメニデスとメリッソスは、万有を不動と見なすことで、生成と消滅を否認した」（DK.:Frag.Meli.A12）。そしてパルメニデスが「感覚への顧慮を斥けた」（DK.:Frag.Par.B7）ように、メリッソスも作品『自然について』（DK.:Frag.Meli.A4）で「現象と視覚に捉えられたものの如何なるものも有るものとしては有りえない」（DK.:Frag.Par.A13）とし、感覚的認識を認めていない。

他方で、メリッソスは、パルメニデスの教説に一大修正を加える。それは「パルメニデスもメリッソスも万有は一つである」（DK.:Frag.Par.A49）とする。しかしパルメニデスが、万有は「限定されている」とし「球形の塊のようなもの」とすることに対し、メリッソスは、それとは反対の無限の道を歩むのである。メリッソスによれば「有るものは、永遠であるように、その大きさも永遠に無限であらねばならない。〔…〕なぜなら、もしそれが無限であるなら、一つであるからである。なぜなら、もし二つのものがあるなら、無限であることは出来ず、相互に限界を持っていることになろうからである」（DK.:Frag.Meli.A5）。換言すれば、パルメニデスが言うように、「万有は一つである」にもかかわらず、万有が限定であるなら、有限の限界の外に別に何かがあることになり、メリッソスによれば「万有は一つ」で無くなるというものである。このメリッソスの反論も、存在の世界を論理だけから見るもので、パルメニデス同様「論理の整合性だけに注目すべきと考えている」（DK.:Frag.Par.A25）からである。この事態は、アリストテレスの表現に従えば、パルメニデスに「一つの不条理が認められるなら、〔メリッソスによって〕

ああした結論は訳もなく出てくる」(Arist.:Phys.186a10) と言うものである。

Ⅶ 多元論と原子論 後期自然哲学

これまでに、ヘラクレイトスの生成変化とエレア学派の「有る」不動という二つの対立する原理が見られる。この二つのアルケーの対立問題を解決しようとして現れたのが、後期自然哲学である。この問題解決を多元論の立場から行なうのが、エンペドクレスとアナクサゴラスである。他方、原子論の立場から問題解決を図ろうとする者に、レウキッポスとデモクリトスが挙げられる。

1、エンペドクレス

エンペドクレス (Empedoklēs: Empe. BC492-432) は、南イタリア「アクラガス (Akragas) の人」(DK.:Frag. Empe. A1) で「ヘラクレイトスが著名となった頃」(DK.:Frag. Empe. A8)、アテナイで活躍し「パルメニデスの信奉者となり」(DK.:Frag. Empe. A7)、「ピュタゴラスの弟子の追随者であった」(DK.:Frag. Empe. A7)。そして「エンペドクレスの弟子には弁論家のゴルギアス (Gorgias) がある」(DK.:Frag. Empe. A1)。エンペドクレスの作品は、叙事詩からなる『自然について』と『カタルモイ (浄化)』(Κάθαρμοι/Katharmoi)、および『医術論』である (DK.:Frag. Empe. A1)。エンペドクレスは、ピュタゴラスと同様に「自然学と神学」(Kant: IX29) を取り上げる人である。作品の一つ目は、自然哲学で合理的なもの、二つ目は、神学で宗教的、神秘的なものである。まず一つ目の『自然について』でエンペドクレスは、先行するヘラクレイトスとパルメニデスの教説を顧慮して、生成変化と一つなる「有る」を統合する形で、新しい多元論の教説を形成する。つまり自然学のミレトス学派は、質料的要素を一つとする一元論であるのに対し、エンペドクレスは基本要素を四つの根 (ρίζωματα /rhizōmata) とする多元論である。彼は、その四元について「物的な基本要素は、火と空気と水と土の四つである」(DK.:Frag. Empe. A28) とする。そしてエンペドクレスによれば、パルメニデスの教説に従って「四元は常に存在し続けるのであって、生成することはない」(DK.:Frag. Empe. A28)。しかしパルメニデスは「感覚への顧慮」(DK.:Frag. Par. B13) の道から、生成消滅が「有るように見える」としている。この「見える」ということからエンペドクレスが、ヘラクレイトスの生成変化の教説を取り入れるものと考えられる。とは言えエンペドクレスにとり、生成消滅と称するものは「基本要素の混合と分離のみである」(DK.:Frag. Empe. B8) として、四元を「結合と分離によって多くなったり少なくなったり、という量的変化」(DK.:Frag. Empe. A28) に置き換えるだけである。そこでエンペドクレスは、混合と分離の生じる動力因として、二つの原理を導入する。その「四元を動かす意味での原理は「愛 (φιλία /philia)」と「争い (νεῖκος/neikos)」である。なぜなら基本要素〔四元〕は、或る時は「愛」によって結合され、

或る時は「争い」によって分離されながら、交互に動き続けなければならないから」(DK.:Frag. Empe.A28)である。この二つの原理は、四元の間であって、引力と斥力をもって作用する。そして四元が「永遠に止むことなく交換し続ける限りでは、それらは円環(周期)を為しつつ常に不動のものとしてある」(DK.:Frag.Empe.B26)。

そこから四つの世界期が「円環のめぐり来るにつれて、[...] 規則正しく、順次に従って、増大し」(DK.:Frag.Empe. B26) 機械論的に展開される。この四つの時期の最初、第一期は「愛」である。「愛」は、何かこのような宇宙世界の最も美しい形状を、多なるものから一つなるものを造り上げる」(DK.:Frag.Empe. B29)。それは、四元が結合する「球体(σφαῖρος/sphairos)」(DK.:Frag.Empe. B28) である。第二期になると「争い」が、混入し「争い」が優位を占め始めると「球体」の内部に動き〔分離〕が生じる」(DK.:Frag.Empe. B31)。第三期は「争い」が、支配する時期」(DK.:Frag.Empe. B30) となり、四元の全てが分離している「無世界状態(ἀκοσμία/akosmia)」である。第四期になると、再び愛が現われ「愛」が一体化の過程によって造る「球体」(DK.:Frag.Empe. B29) により結合が形成される。この四つの時期が、新たに永遠に円環する。この四つの時期のうち、パルメニデス哲学の原理「万物は一つである」は、第一期の「球体」に、ヘラクレイトス哲学の原理「生成変化」は、第一期以外での「結合と分離」に見られる。

このように見てくると、エンペドクレスの自然哲学は、四元を「物的」(DK.:Frag.Empe. A28) なものとしている。しかし二つ目の作品『カタルモイ』で、四元を非物的にも見ている。それは詩的に「まずは聞け、万物の四つの根を——輝けるゼウス(Zeus)、生命を育むヘレ(Hērē)、またアイドネウス(Aidōneus)、そして[...] 涙によって潤すネスティス(Nestis)」(DK.:Frag.Empe. B6) と神の名で呼んで、神的、精霊的なものとしている。この事態は、自然学と共に、神学、宗教の面で、エンペドクレスは「ピュタゴラス学派に属して」(DK.:Frag.Empe. A11) いることの現れである。そして彼は、霊魂の世界を探求する。この宗教の面で、エンペドクレスは「過ちを犯した魂は、この地上〔此岸〕に転落するのが掟であり、彼自身も「神の御許より追われたる」者となり「狂わしい争いを信じたばかりに」ここ〔此岸〕に来た」(DK.:Frag.Empe. B115) とする。このようにして「それら(魂)は懲らしめを受け、浄められることによって、再び本来の場所〔彼岸〕と序列に復する時まで、これは続く」(DK.:Frag.Empe. B115) のである。エンペドクレスがここで表現しているのは、オルペウス教の「彼岸と此岸の二元論」¹⁶⁾ であり、ピュタゴラス学派のいう「魂の輪廻転生の説」(DK.:Frag.Empe. B137) である。このようにエンペドクレス哲学は、四元の物的な面で、ヘラクレイトスの生成変化とパルメニデスの「有る」存在との一つの統合であり、他方で、四元の非物的な面では、オルペウス教、ピュタゴラス学派を体現している。しかしここからエンペドクレス哲学には、神学と自然学との調和統一は見られないが、少なくとも双方の関連性が推量される場所である。

2、アナクサゴラス

アナクサゴラス (Anaxagorās: Anaxa. BC500-428) は、イオニアの「クラゾメナイ (Klazōmenai) の人で、アナクシメネス」(DK.:Frag. Anaxa. A1) 系統の自然哲学者である。作品としては『自然について』(DK.:Frag. Anaxa. B1) が挙げられる。エンペドクレスによって開かれた多元論の道は、アナクサゴラスによって更に一歩進められる。エンペドクレスと同様、アナクサゴラスも、パルメニデスの教説に従って「如何なるものも、生成もしなければ、消滅することもなく、同一のままである」(DK.:Frag. Anaxa. B5) とする。そして生成消滅に代えて「生成を「一つに混合する」と言い、消滅を「分離する」と言う」(DK.:Frag. Anaxa. B17)。それゆえ「混合と分離があると明瞭に語る」(DK.:Frag. Anaxa. B17)。ところでエンペドクレスが基本要素を四元とするのに対して、アナクサゴラスは「同質部分体 (τὰ ὁμοιομερή/ta homoiomere)」(DK.:Frag. Anaxa. A45) という無限の基本要素を立てる。

では同質部分体の「混合」とは何か。同質部分体には「元のもの〔始源〕には、これが最小と言うものも、最大と言うものも存在しない、[...] 全てのものが全てのものの中に含まれている」(DK.:Frag. Anaxa. B3)。これが「混合」である。これは、ものを量的にではなく、質的に考えているから、である。では同質部分体の無限とは何か。それは例えば「どうして毛髪ならざるものから毛髪が生じえようか、肉ならざるものから肉が生じえようか」(DK.:Frag. Anaxa. B10)。無限分割の可能性として、毛髪はどんなに短く切っても毛髪の質を無限に失わない。同質部分体は、不変で、無限なのである。では同質部分体の「分離」は、その混合状態においてどのようにして生じるのか。まず「混合体として在る全てのものには、多数かつ多種多様なものが含まれている、すなわち全ての事物の種子 (σπέρμα /sperma) として、多種多様な形態や色や味わいを持ったものが含まれている」(DK.:Frag. Anaxa. B4)。そして「その中で一つのものの中の最も多く含まれているもの、それが最も明白に認識できるものとして、一つのことを形作る」(DK.:Frag. Anaxa. B12) ように、質的でなく、量的に思考する。これが「分離」である。原則として「全てのものが、全てのものの部分 (μοῖρα /moira) を分け持っている」(DK.:Frag. Anaxa. B6) し、「全てのものが、全てのものから分離してくる」(DK.:Frag. Anaxa. B3) ののである。それは、「混合」の中に「分離」が起こると言う原則である。これが同質部分体の「混合と分離」の過程である。

では「混合と分離」が生じる動力因とは何か。自然学者であるアナクサゴラスは、それについて物體的な「知性ヌース (νοῦς/nous)」(DK.:Frag. Anaxa. A1) という全く異質的な原理を取り上げる。アリストテレスによれば「アナクサゴラスは、およそ全てのものに優先する原理として、知性を措定し、[...] 知性が万有を動かす」(DK.:Frag. Anaxa. A55. Arist.:de anima, A2, 405b15) とする。従って知性は、動力因として、機械論的に説明されている。それゆえプラトンも「アナクサゴラスが言うように、知性は自律的であり、如何なるものをも混合せず、万物を

通じて進み行きつつ、全ての事物を秩序づけている」(DK.:Frag. Anaxa. A55. Plat.:Cratyl. 413C) とする。アナクサゴラスの宇宙理論では、この「知性は、無限にして」(DK.:Frag. Anaxa. B12)、「宇宙全体の旋回運動を支配し」(DK.:Frag. Anaxa. B12)、「この旋回運動をも秩序づける」(DK.:Frag. Anaxa. B12) とされるように目的論的でなく、機械論的説明である。以上のように「ミレトス学派の人、アナクシメネスの弟子であった」(DK.:Frag. Anaxa. A2) アナクサゴラスの自然哲学には、一方で、物的な基本要素「同質部分体」が無限として語られ、他方で同じ「同質部分体」の「混合と分離」を秩序づける物的な知性が展開されている。このように「アナクサゴラスは、原理として、無限なものと知性の二つを主張している」(DK.:Frag. Anaxa. A41) ことになる。

3、デモクリトス

レウキッポス (Leukippos: Leu. BC480-?) は、ドラキア地方の「アブデラ (Abdēra) の人」(DK.:Frag. Leu. A1) である。レウキッポスには『大宇宙体系』(Μέγας διάκοσμος /Megas diakosmos) (DK.:Frag. Leu. B1) の作品がある。彼は「ゼノンの弟子であったが、彼と同じ見解を奉ずることをせず、無限に多くの、常に運動変化して止まないものがあり、絶えず生成と変容が行なわれている、と言う。また基本要素は、充実体と空虚 (κενόν/kenon) である」(DK.:Frag. Leu. A10) とする。そして「レウキッポスの弟子であるデモクリトス (Dēmokritos: De. BC460-370) [も] [...] アブデラの人」(DK.:Frag. De. A40) である。デモクリトスには『小宇宙体系』(Μικρός διάκοσμος /Mikros diakosmos) (DK.:Frag. De. B5) の作品が挙げられる。デモクリトスは、エンペドクレスやアナクサゴラスの多元論を集約し、一元論的自然哲学の完成者となる。まずデモクリトスは、エンペドクレスの言う四元の基本要素やアナクサゴラスの言う無限の同質部分体に似せて、レウキッポスと同じく「充実体と空虚が基本要素である」(DK.:Frag. De. A40) とする。そしてデモクリトスは、その充実体について「分割できない大きさのもの〔原子アトマ ἄτομα/atoma〕を根本存在」(DK.:Frag. De. A42) とする。その原子は、パルメニデスの言う「有る」と同様に「消滅することのないもの」(DK.:Frag. De. A43) であるが「数的に無限の極めて小さな物体として分割できないもの〔原子、非分割体〕」(DK.:Frag. De. A43) である。しかも原子には、エンペドクレスに見られる四元の質的差異はなく、物の性質には、原子の「向きと形態と配列の差異がある」(DK.:Frag. De. A45)。この事態についてレウキッポスもデモクリトスも、例えば「AとNの場合が形態の差異、ANとNAの場合が配列の差異、HとΠの場合が向きの差異である」(DK.:Frag. Leu. A6. Arist.:Metaph. 985b10)。それは物の性質を、質的差異でなく、量的差異から説明している。次に空虚も基本要素とすることについて、デモクリトスは「有らぬもの〔空虚〕は、有るものに少しも劣らず有る」(DK.:Frag. De. B156. Arist.:Metaph. 985b) と規定する。従って「空虚もまた或る種の実質と固有の实在性を持って

いると言う意味である」(DK.:Frag.De.B156)。このように基本要素として、充実体と空虚は説明されるが、では原子の運動は、如何に認識されるか。先行するエンペドクレスの場合、四元の運動は「愛」と「争い」に帰せられ、世界期は、機械論的に説明される。アナクサゴラスの場合も、同質部分体の運動は「知性」に従うという機械論的説明である。そしてデモクリトスも、「原子」の運動条件を「目的となるものすらを論じることをせずに、自然が関わっている全ての事柄を必然に帰している」(DK.:Frag.De.A66)。それゆえ「万事は宿命の為せるところにあり、従って宿命が必然の力をもたらすとする立場」(DK.Frag.De.A66)を取る。それゆえ原子の運動は、自然の必然性という機械論的説明によってなされている。この教説が、デモクリトスやレウキッポスのいう原子論の内実である。しかしカントによれば「古代デモクリトス以来ほとんど変更を加えられること」(Kant: IV 533)のないこの「機械論的説明方式 (mechanische Erklärungsart)」は「見せ掛けの必然性にある」(Kant: IV 533)ので「これに対して、動力学的説明方式 (dynamische Erklärungsart) を導入する」(Kant: IV 533) 必要がある、とする。なぜならカントは、デモクリトスでは「運動は永遠で創造者が無く、多くの秩序の起源である衝突は、何の根拠もない偶然であった」(Kant: II 148)とし「デモクリトスに帰せられる偶然性 (Zufälligkeit) の体系は、文字どおりに解すれば、明らかに不合理である」(Kant: V 391)と論評する。

またレウキッポスとデモクリトスは、認識を「感覚と知性」(DK.:Frag.Leu.A30)に分けている。しかしレウキッポスと異なり、デモクリトスは、すでにパルメニデスが認識を真理の道と憶見の道に分けているように、認識をさらに次のように明瞭に二つに分けている。すなわち彼は「思惟を通じた認識の方を「真正の認識」と呼び、これ(思惟)の判定に関する信頼性を、真正の認識に帰している。他方で、諸感覚を通じた認識を「闇の認識」と名づけている」(DK.:Frag.De.B11)。そして彼は「真正の認識を闇の認識から隔絶している、[...] それから真正の認識の方が、闇の認識よりも優位にあることを分明する」(DK.:Frag.De.B11)。なぜなら、それは前者が後者よりも「より微細なものを認識する手段を持っている」(DK.:Frag.De.B11)からとして、感覚の認識を過小評価する。

なおレウキッポスに倫理問題は見られないが「ピュタゴラス学派の人々の崇拜者であった」(DK.:Frag.Pytha.6) デモクリトスには、実生活における処世訓として「デモクリトスの箴言」(DK.:Frag.De.B35-115)がある。彼の倫理問題は、七賢人の理想的人間像と同じく、高い理想主義に支えられている。例えば、幸福について「幸福 (eudaimoniā) と不幸は魂にかかっている」(DK.:Frag.De.B170)、「幸福は肥えた家畜に存するのではなく、また黄金に存するでもない。魂は神霊 (δαίμων/daimōn) の住まうところ」(DK.:Frag.De.B171)にある。魂について「魂の善き事柄を選ぶ人は、より神的なものを選び、身体の善き事柄を選ぶ人は、人間的なものを選ぶ」(DK.:Frag.De.B37)。快樂について「全ての快樂 (εὐεστώ/euestō) ではなく、美

しいことにおける快樂を選ばなければならない」(DK.:Frag.De.B207)。これらの倫理的生活訓は、心の恒常的な平安を理想境とするもので、慣習的な道德とは異なっている。デモクリトス哲学の後世への影響としては、約一世紀後に、ヘレニズム期のエピクロス (Epikūros) が、デモクリトスの原子論や倫理問題を、新たに自然学、倫理学として展開することになる。

VIII ソフィスト思想

ミレトス学派の自然学や多元論と原子論の自然哲学が、万物のアルケーを考える時、自然を問うが、ソフィスト (σοφιστής/sophistēs) 思潮は、自然の代わりに、人間を主題とする。このようにソフィスト思潮を、ソクラテス以前の哲学として考察する際には、異なった観点が要請される。元々「ソフィストの名の下には、全ての事柄について理性的かつ洞察豊かに語ることの人物が考えられていた」(Kant:IX28)。従って「ソフィストと言うのは、かなり広義の名称であったし、また哲学の方では、或る種の美の追求であり、言論に係わる探究」(DK.:Frag.Sophist.Name.A1) を行なう自由思想家である。それゆえ人は、ソクラテスやプラトンを、ソフィストとも呼んでいた (DK.:Frag.Sophi.Na.A1)。

そのソクラテス、プラトンと同時代であるが、しかしここで取り上げる特定の「ソフィスト達は、人を欺こうとして、ものを言い、またものを書くにも目指すところは、自分の儲けであって、誰にも何らの益を与えない。実際、彼らの誰一人として知者 (σοφός/sophos) であった試しはなく、また現にそうでもない」(DK.:Frag.Sophi.Na.A2a)。ソフィストの仕事は「弁証論的に、つまり真理や知恵の見せ掛けを、認識に与えることだけを目指す」(Kant:IX26) ことである。そして「ソフィストは、全てのことについて理屈をこねようとし、見せ掛けに真実の様子を与え、黒を白と言いくるめることを事とした」(Kant:IX28)。これがソフィストの弁論術である。しかしこのソフィストの思潮の特色は、単に第二期アテナイ古典時期哲学の成立を促すだけでなく、むしろ便宜主義的で、主観的認識論や価値論に向ったことである。認識については、パルメニデスやデモクリトスも論じているが、ソフィストの認識は、詭弁的、懐疑的で、相対主義的認識論である。多数のソフィスト達のうち、著名なのは、プロタゴラスとゴルギアスである。

1、プロタゴラス

プロタゴラス (Prōtagorās: Protag. BC500-430) は、デモクリトスと同じ「アブデラの人。彼は、荷物運搬人であったが、デモクリトスと出会って哲学を始め、やがて弁論術に赴いた」(DK.:Frag.Protag.A3)。彼が「デモクリトスに学んだ」(DK.:Frag.Protag.A1) のは、原子論でなく、認識論である。そしてプロタゴラスは「自分が「ソフィスト」であることを認めている」(DK.:Frag.Protag.A5.Plat.Protag.317B) し、「当代きっての並ぶものなき最大のソフィストであった」(DK.:Frag.Protag.A23) のである。しかもプロタゴラスは、絶対的な判断基準

(アルケー)を撤廃した真理判断停止のソフィストである。プロタゴラスは作品『打倒論法』(DK.:Frag.Protag.B1)で「全ての事象や思いやり (δόξα/doxa) は真であり、或る人にとっての全ての事象や思いなしも、すなわちその本人にとって有るがゆえに、真理 (ἀλήθεια/elētheia) は、関係的なもの」(DK.:Frag.Protag.B1)と主張する。それゆえ第一命題は「どの事象についても互いに対立し合う二つの言明が成り立つ」(DK.:Frag.Protag.A13)ことになる。そこには、事象についての客観的尺度は、一般に存在せず、主観的な真理が何通りも存在することになる。そこで有名な第二命題では「人間は万物の尺度である。有るものについては有ると言うところの、有らぬものについては有らぬと言うところの尺度である」(DK.:Frag.Protag.A14)が、人間尺度説と呼ばれるものである。ではここでの「人間」とは何を指すか。「人間は、自分たちの異なった状態に応じて、その時々で違ったものを把握する」(DK.:Frag.Protag.A14)。それゆえ「人間」は、客観的でなく、主観的な個人としての人間を指している。例えば「自然に合致した状態にある人間は、質料のうちから自然に合致した人間に現象することの可能なものを認めるが、しかし自然に反した人間は、自然に反した人間に現象することの可能なものを認めるのである。[...]従ってプロタゴラスによれば、人間が全ての有るものの規準になる」(DK.:Frag.Protag.A14)のである。このソフィスト思潮の特色は、その時代の他律的な無定見を概念的に表現していることである。

こうした相対主義的認識論から、徹底した現実対策主義が生まれて来る。そして「弱論を強弁する」(DK.:Frag.Protag.A21)、「弁論術 (ῥητορικὴ/rhētorikē) や論争術」(DK.:Frag.Protag.A21)と言う名の徳 (ἀρετή/aretē) の教育が重視される。また言論 (λόγος /logos) について「プロタゴラスは、習練を欠いたテクネー技術 (τέχνη) は無に等しく、技術を欠いた習練は無に等しい」(DK.:Frag.Protag.B10)とする。さらに古代ギリシア哲学が神や魂を重要視するのに対し、プロタゴラスは「神については、それが存在するかどうかも、また如何なる姿形したものであるかも、私は知りえない」(DK.:Frag.Protag.A12.B4)とする。この神に関する判断停止は「存在しないことを知っている」と言うのと同じことである」(DK.:Frag.Protag.A23)。プロタゴラスは、このような無神論と言う「不法行為を犯した」(DK.:Frag.Protag.A2)ことで「アテナイの全領土から追放される」(DK.:Frag.Protag.A2)ものとなる。カントも「そのためにプロタゴラスは、アテナイ市民によって、アテナイの彼の所有地から追い立てられ、その著作も公衆の面前で焼き払われた」(Kant:VI486)としている。

2、ゴルギアス

ゴルギアス (Gorgias: Gorg. BC483-376) は、シシリー島「レオンティノイの人にして [...] エンペドクレスに師事した弁論家」(DK.:Frag.Gorg.A2)である。彼は「最古の弁論家と言ってよい人」(DK.:Frag.Gorg.A26)である。ゴルギアスには『自然について』(DK.:Frag.Gorg.

B2) という作品がある。プラトンによれば、ゴルギアスの言う「弁論術とは、説得を造り出すものであるが、その説得は効果があれば良く、正邪について教える力はないように見受けられる」(DK.:Frag.Gorg.A28.Plat.:Gorg.455A) と揶揄されている。

ゴルギアス哲学の要点は、セクストス・エンペイリコス (Sextōs ho Empeirikos) によれば、次の三項目である。それは「論題の第一は「何ものも有らぬ」と言うこと、第二は「ものが有るにしても人間には思考されない」こと、第三は「ものが思考されても、隣人には決して伝えることも理解されることも出来ない」こと」(DK.:Frag.Gorg.B3) である。さて「第一の「何ものも有らぬ」と言うこと」の根拠は「有らぬものが有るとすれば、有るとともに有らぬことになり、不可能であるから、有らぬものが有ることは、ありえない」(DK.:Frag.Gorg.B3) ことになる。このゴルギアスの議論は、ゼノンの論法で、パルメニデスの「真理の基準」(DK.Frag.Par.B7) である「有らぬことは不可能」(DK.:Frag.Par.B2) というアルケーを構成している。このような論法を可能とする「ゴルギアスの議論における困難は、[...] 真理の規準が何もないからである」(DK.:Frag.Gorg.B3)。それゆえセクストスによれば「ゴルギアスは、真理の規準を廃棄した人々と同じ系列に属する」(DK.:Frag.Gorg.B3) とされる。アリストテレスも「真理の規準という」「真面目な厳肅さは、その反対に、笑って、笑いは真面目に応じることで、崩す」べきだと、ゴルギアスは言ったが、的を射ている」(DK.:Frag.Gorg.B12.Arist.:Rhet.Γ18.1419b13) とする。第二の「人間には思考されない」と言う根拠は「もし思考されるものが、そのまま直ちに存在するものとして有るのでないならば、存在は思考されない」(DK.:Frag.Gorg.B3)。「もし思考されるものが、とりもなおさず存在するなら、思考されるものは、全て人がどのように思考しようとも、存在すところになる。しかしこれは全くの不条理である」(DK.:Frag.Gorg.B3)。第三の「隣人に伝えることが出来ない」と言う根拠は「我々が隣人に知らせているのは、存在ではなく、言葉である」(DK.:Frag.Gorg.B3) からとする。ここからゴルギアスは、弁論術の手段である言葉を重視するものとなる。ゴルギアスによれば「弁論術とは、聴き手を納得させるもので、その仕事の全体および要諦は、説得と言うことに帰着する」(DK.:Frag.Gorg.A28.Plat.:Gorg.453A)。そして存在でなく「言葉によって説得されたのであれば、不正を犯したのではなく、不運に遭ったのである」(DK.:Frag.Gorg.B11) とする。従ってここでも「真理の規準は何も無い」(DK.:Frag.Gorg.B3)。しかもゴルギアスは「言葉は、強大な権力者である」(DK.:Frag.Gorg.B11) とし、「自然の理は [...] 強者が先導し、弱者が追随することにある」(DK.:Frag.Gorg.B11) として、強者の権力論をも持ち出すのである。

なおゴルギアスの次世代ソフィストに「イソクラテス (Isokratēs, BC436-338)」(DK.:Frag.Gorg.A2) がいる。古代ギリシアのソクラテス、プラトン、アリストテレスの古典時期では、無定見の弁論家ソフィストは、排斥されていた。とは言えプラトンは「説得の技術こそは、全ての技術に優るものである」(DK.:Frag.Gorg.A26.Plat.:Phileb.58A) として弁論術それ自体は

擁護する。そして後年、カントは、大学での新しい教授法を論じる段で「今世紀のような社交的な世紀に、楽しめて教育的である」(Kant: II 313) ためには「弁論家イソクラテスが置かれたような苦境の中に、しばしば身を置くことは、少なくとも一人の学者としては、愉快ではありえない」(Kant: II 313) として、弁論術を擁護している。

IX 結

ホワイトヘッドは自らの「思想の脈絡がプラトンの」¹⁷⁾として、プラトン哲学を高く評価するが、プラトン自らもソクラテス以前哲学者達の一部を高く評価することを顧慮しない。なぜか。カントによれば、次のようである。

人はどのようにして哲学を学ぶことが出来るのだろうか。人は哲学的認識をそれらの産出の第一の源泉から、すなわち理性 (Vernunft) の原理から導き出すのか、あるいは哲学した人々からそれらを学ぶかである。最も易しい道は、後者である。しかしそれは本来の意味での哲学ではない。[...] 哲学者は、哲学することができなくてはならない。そのためには、哲学を学んではならない。それをしてしまうと、全く評価することが出来なくなる。例えば、人はプラトン (Plato) の言うことは、全てを真実だと信じてしまう [...] からである (Kant: XXVIII 534)。

従ってホワイトヘッドの言うように、ヨーロッパ哲学の一般的描写は「プラトンについての一種の脚注から成り立つ」とは、言い得ないであろう。

本論では、西洋哲学の始まりは、第一期ソクラテス以前哲学にあるという点で、我々の知見を豊かにした。その限りで、ソクラテス以前哲学者達の教説を、一つの「哲学的自己省察」として解明する本論の意図は実現された、と考える。

(未完)

注

- 1) Whithead, Alfred North: *Process and Reality, An Essay in Cosmology*, 1927-28. New York: Free Press, 1978. p. 39. ホワイトヘッドの言う「プラトンへの脚注」とは何を意味するのか。ホワイトヘッドは、それを「プラトンの著作の至る所に散在している普遍的なアイデアの豊富なこと」(ibid.)、「プラトンが受け継いだ知的伝統」(ibid.)とする。そしてその「プラトンの普遍的見地」(ibid.)である「アイデア」を「永遠的对象 (eternal objects)」(ibid. p. 44)とする。このことに限って言えば、ホワイトヘッドの言う「知的伝統」と「永遠的对象」は、ソクラテス以前哲学者達の多くが、様々な様式で表現するアルケーとその意味づけを表すものとなる、と言ってよいであろう。
- 2) プラトンは、ソクラテス以前哲学者達の一部を以下の箇所でも高く評価する。例えば、ピュタゴラスについて Burnet, J.: *Plat.: Republic*, X 600A-B。ヘラクレイトスについて Cratylus, 402A。パルメニデスについて Theaetetus, 180D, 181A, 184E; Socrates, 224E, 237A。Symposium, 178B。

- 3) Nietzsche-Werke, *Kritische Gesamtausgabe*, Hrsg. Giorgio Colli und Mazzino Montinari, Gruyter, Berlin/New York, 1972. Friedrich Nietzsche, *Nachgelassene Fragmente, Anfang 1888 bis Anfang Jannuar 1889*. S. 70. 14 [100].
- 4) ハイデッガーは、歴史に先行し、歴史を規定しているものを元初 (Anfang) と名づけ、こうした元初を思考したプラトン以前哲学者達としては「アナクシマンドロスとパルメニデスとヘラクレイトスが唯一の元初的な思索家達 (die einzigen anfänglichen Denker) である」と高く評価する*)。

*) Heidegger, Martin: *Gesamtausgabe II Abteilung: Vorlesungen 1923-44*, Bd. 54; *Parmenides*. Feiburg Vorlesung Wintersemester 1942-43, Hrsg. Manfred S. Frings. Vittorio Klostermann. Frankfurt am Main, 1982, 2 Aufl. 1992. S.2 u.10.
- 5) Kant, Immanuel: *Kant's gesammelte Schriften*. Hrsg. von der Königlich Preussischen Akademie der Wissenschaften, Bd. I – XXIX, Berlin 1902-1983.
- 6) カントが取り上げる詩人、宗教者、哲学者は、歴史順で以下の者達である。それは、ゾロアスター、ホメロス、アイスキュロス、オルペウス、七賢人、イオニア学派、タレス、アナクシマンドロス、アナクシメネス、ピュタゴラス、ヘラクレイトス、エレア学派、クセノパネス、ゼノン、アナクサゴラス、デモクリトス、ソフィスト、プロタゴラス、イソクラテスである。なおカント全集には、講義録の一部 (XXVIII535-540) に、簡単な哲学史の叙述があるのみである。と言うのもカントにとって、哲学の目的は「形而上学の従来の方法をを変革する試み」(BXXII) にあったから。しかしカントは「哲学は (それが歴史的でない限り) 決して学ぶことは出来ない」(BXXII) とするように、哲学史に価値を置いているのである。
- 7) Cassirer, Ernst: *Philosophie der Aufklärung*, Verlag von J. C. B. Mohr, Tübingen 1932. Vorrede XV.
- 8) Diels, Hermann—Kranz, Walther: *Die Fragmente der Vorsokratiker*, 1903. 3 Bde. Berlin 1951-52.
- 9) Homeri: *Irias* / editid Allens, Thomas William, Arno Press, New York / 1979 (Greek texts and commentaries), Tomvs (Volumes) III, ΙΑΙΑΔΟΣΕ (XIV) p.47. (201-202) .
- 10) Heciod: *Theogony / works and days*, Theognis elegies, Translated and with introductions by Dorthea Wender, Penguin books, This translation first published 1973. Made and printed in Great Britain by Richard Clay (The Chaucer Press) Ltd. Bungay, Suffolk set in Monotype Ehrhardt, p.27 (116-122).
- 11) Hirschberger, Johannes: *Geschichte der Philosophie*, I Altertum und Mittelalter, 10 Aufl. Verlag Herder, Freiburg / Basel / Wien 1976.S.15.
- 12) Ebd., a.a. O.S. 16.
- 13) Ebd., a.a. O.S. 15.
- 14) Ebd., a.a. O.S. 16.
- 15) Ebd., a.a. O.S. 30.
- 16) Ebd., a.a. O.S. 16.
- 17) Whithead, A. N.: a.a. O.S. 39.

参考引用文献

- Burnet, John: *Platonis Opera*, 5 vols. Oxford Classical Texts, 1900-07. 田中美知太郎・藤沢令夫編『プラトン全集』全15巻・別巻、岩波書店、1974-78年。
- Cassirer, Ernst: *Philosophie der Aufklärung*, Verlag von J.C.B.Mohr, Tübingen 1932. カッシーラー・中野好之訳『啓蒙主義の哲学』紀伊国屋書店、1962年。
- Diels, Hermann—Kranz, Walther: *Die Fragmente der Vorsokratiker*, 1903.3 Bde. Berlin 1951-52. ディーヘルス・クランツ・山本光雄訳『初期ギリシア哲学断片集』岩波書店、1959年。『ギリシア思想家集』世界文学大系63、筑摩書房、1965年。廣川洋一『ソクラテス以前の哲学者達』講談社学術文庫1306、講談社、1997年。内山勝利編『ソクラテス以前哲学者断片集』全5冊、岩波書店、1996-98年。日下部吉信編訳『初期ギリシア自然哲学者断片集』1. 2. 3ちくま学術文庫、筑摩書房、2000-01年。
- Heidegger, Martin: *Gesamtausgabe II Abteilung: Vorlesungen 1923-44*, Bd.54; *Parmenides*. Feiburg

- Vorlesung Wintersemester 1942-43, Hrsg. Manfred S. Frings, Vittorio Klostermann, Frankfurt am Main, 1982, 2 Aufl. 1992. ハイデッガー・北嶋美雪・湯木和男訳「パルメニデス」『ハイデッガー全集』第54巻、創文社、1996年。
- Heciod: *Theogony / works and days*, Theognis elegies, Translated and with introductions by Dorthea Wender, Penguin books, This translation first published 1973. Made and printed in Great Britain by Richard Clay (The Chaucer Press) Ltd. Bungay, Suffolk set in Monotype Ehrhardt. ヘシオドス・廣川洋一訳『ヘシオドス』岩波文庫、岩波書店、1984年。
- Hirschberger, *Johannes: Geschichte der Philosophie*, I Altertum und Mittelalter, 10 Aufl. Verlag Herder, Freiburg / Basel / Wien 1976. ヒルシュベルガー・高橋健一訳『西洋哲学史』〔I 古代〕理想社、1976年。
- Homeri: *Iriads* / editid Allens, Thomas William, Arno Press, New York / 1979 (Greek texts and commentaries), Tomvs (Volumes) I, II and III. ホメロス・松原千秋訳『イリアス』〔T.W.アレン校訂〕上下巻、岩波文庫、岩波書店、1992年。
- Kant, Immanuel: *Kant's gesammelte Schriften*. Hrsg. von der Königlich Preussischen Akademie der Wissenschaften, Bd. I – XXIX, Berlin 1902-1983. 『カント全集』理想社版、全18巻、1965-77年。『カント全集』岩波書店版、全22巻、別巻、1999-2006年。
- Nietzsche-Werke, *Kritisch Gesamtausgabe*, Hrsg. Giorgio Colli und Mazzino Montinari, Gruyter, Berlin / New York, 1972. Friedrich Nietzsche, Nachgelassene Fragmente, Anfang 1888 bis Anfang Januar 1889. ニーチェ・氷上英廣訳『ニーチェ全集』第十一巻（第II期）白水社、1983年。
- Ross, William David: *The Works Aristotle*, translated into English under editorsip Ross, William David, 12 vols. Oxford: Clarendon Press, 1908-52. 出隆監修・山本光雄編集『アリストテレス全集』全17巻、岩波書店、1968-73年。
- Russel, Bertrand: *History of western philosophy and its connection with political and social circumstances from the earlist times to the present day*, Publisher: George Allen and Unwin Ltd. London, 1946. ラッセル・市井三郎訳『西洋哲学史』全3冊、みすず書房、1970年。
- Whithead, Alfred North: *Process and Reality*, An Essay in Cosmology, 1927-28. New York: Free Press, 1978. ホワイトヘッド・平林康之訳『過程と実在』I、みすず書房、1981年。
- 藤澤令夫「哲学の形成と確立—タレスからアリストテレスまで」『藤澤令夫著作集V』所収、岩波書店、2001年。
- 藤澤令夫「プラトンとホワイトヘッド—プラトン学派の視点から」『藤澤令夫著作集VI』所収、岩波書店、2001年。
- 出隆『ソクラテス以前』東海書房、1947年。
- 日下部吉信『ギリシア哲学と主観性—初期ギリシア哲学研究』法政大学出版局、2005年。
- 内山勝利責任編集『哲学の歴史—古代I』中央公論新社、2008年。
- 森哲彦「カント批判哲学の解明（その1）」名古屋市立大学大学院人間文化研究科『人間文化研究』第13号所収、2010年6月。
- 森哲彦「カント批判哲学の解明（その2）」名古屋市立大学大学院人間文化研究科『人間文化研究』第14号所収、2011年2月。